

名古屋文化情報

2026
Autumn

No. 419

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／ガレリアフィナルテ

随想／劇作家・演出家・メニコン シアターAoi芸術監督 山口茜さん

この人と…／岡田純奈バレエ団代表 岡田純奈さん

視点／まちなかを文化芸術の入口に～伝統芸能への市民参加と地域のお祭り

#zoom up／現代美術家 植松ゆりかさん



2026

Autumn

表紙

「金色鯰大魔人」

(2026年/H45×W20×D20cm/陶、金彩)

幼少期から親しんでいたプラモデル、フィギュアのイメージを陶による手びねりで制作しています。プラモデルの硬さ、土と釉薬の生物的な柔らかさの間に「不完全さ」の中にある「美しさ」を探る試みをしています。



もり まさきょういち
森正響一

2020年 名古屋造形大学造形学部造形学科彫刻コース卒業

2025年 瀬戸市新世紀工芸館陶芸コース修了

【展示】

2023年 Various Robots/Art Space & Cafe Barrack (瀬戸市)

2025年 Your Hero/L gallery (名古屋市)

2026年 Future Remains/新町ビル (岐阜県多治見市)

【ウェブサイト】

<https://www.instagram.com/kyouichi1127/>

Instagram QR



Contents

Pick Up Gallery ガレリアフィナルテ 2

随想 劇作家・演出家・メニコン シアターAoi芸術監督

山口茜さん 3

この人と... 岡田純奈バレエ団代表 岡田純奈さん 4

視点 まちなかを文化芸術の入口に

～伝統芸能への市民参加と地域のお祭り 8

#zoom up 現代美術家 植松ゆりかさん 10

「なごや文化情報」編集委員

大寺資二 (舞踊家・大寺資二バレエアカデミー主宰)

黒田杏子 (ON READING)

小塚憲二 (作曲家・編曲家)

設楽 陸 (アーティスト)

常磐津網鵬 (常磐津奏者)

望月勝美 (編集者・ライター)

Pick Up Gallery



大崎のぶゆき「セルフ・ポートレート (ツ)」
(2026年2月17日 - 3月14日)

ガレリアフィナルテ

1991年の秋、名古屋・上前津にて開廊。入居していたビルの老朽化のため、2021年12月に閉廊し、2022年に栄2丁目に移転・リニューアルオープンした。展示作品は平面、立体、インスタレーションなど。紹介作家は主に東京の現代美術作家で、伊藤誠、赤塚祐二、松浦寿夫、岡崎乾二郎、O JUN、豊嶋康子など。関西からは岡田修二、早逝した館勝生など。地元の作家では、倉地比沙支、文谷有佳里、大崎のぶゆきなど。現在の空間は以前のホワイトキューブの広さに比べてあまりにも狭く、次なる空間を模索している現況。“今日”という時代を反映し、問題意識の鋭い作家を紹介することを課題としている。

設 立 1991年 オーナー 福田 久美子
住 所 〒460-0008 名古屋市中区栄2丁目4番11号
チサンマンション広小路209号室
電 話 052-212-4754

取り扱い作家 伊藤誠、松浦寿夫、岡崎乾二郎、大崎のぶゆき、豊嶋康子、
倉地比沙支、文谷有佳里、真島直子、遠藤泉女

ウェブサイト <https://gallefinar.exblog.jp>

随想

スリル



劇作家・演出家・メニコン シアター Aoi 芸術監督

や ま く ち あかね

山口茜

現在、演劇を上演するトリコ・Aとサファリ・Pの代表。文化庁新進芸術家海外留学制度研修員、セゾン文化財団シニアフェローなどを経て、2023年よりメニコン シアター Aoi 芸術監督。

私は、劇作家を名乗っている。劇作家とは舞台の脚本、つまり戯曲を書く人のことだ。ここ数年、いわゆるスランプに陥っていた。何を書いていいのかわからない。出力の仕方がわからないのか、書きたいことがないのか、それともそもそも書きたいと思っていないのかの見分けをつけるのにかなりの時間を要した。色々あって脚本の書き方の本を読み漁り、私には技術が足りなかったのだ、と結論づけて、最近やっと再スタートを切ることができた。その際、非常に有効だったのが「自分が答えだと思っている地点をスタートに書き始める」という書き方だ。例えば私は今、『怪物』というタイトルの戯曲を書いている。

怪物といえばまず、退治される存在として想起されるのではないだろうか。私たちの外側にいて、私たちを脅かし、だからこそ排除されるべきもの。けれど、怪物は本当に外側にいるのだろうか。退治すれば済む相手なのだろうか。むしろ怪物とは人間の内部に存在する、私たちが見たくないもの、名前をつけられないもののことではないか。しかしこれは既存の怪物譚にはよくある展開だ。怪物を退治しようとしていた人間たちこそが、実は怪物だった、という結末。それならば、こうするのはどうだろう。怪物を、排除する対象ではなく、共存せざるを得ない存在だと気がつく物語。しかもちょっと愉快だったらいいな。

よし、それでは愉快的な怪物と共存する話を書こう！ という結末を目指して戯曲を書き始める

と、書けない。まったく筆が進まない。あとはその答えに辿り着くためのプロセスを書けば良いだけなのに、私の用意した答えにたどり着くように登場人物たちを動かし、葛藤を生み出してそれを乗り越えさせれば良いだけなのに、書けない。なぜならそこにはスリルがないからだ。戯曲を書くということは、自分の中にすでにある答えへと、うまくたどり着くためのプロセスを作ることではない。むしろ、その答えを出発点として、登場人物や設定の力を借りながら、奥にある、自分でもまだ気づいていない考えを掘り起こしていく作業だったのだ。考えがあるから書き始める。けれど、書くことは、その考えを証明するためにあるのではない。その考えを入口にして、もっと深いところへ降りていくためにある。自分ではもうわかっていると思っていたことの下に、まだ言葉になっていない違和感や、矛盾や、恐れや、欲望が眠っている。そこへ向かって潜っていくスリルそのものが、書くということなのだ。今回のスランプで初めて気がつくことができた。

ゴールは決めない、ということが決まり、急に不安になった。何を書くかもわかっていないのに、本番の日は決まっていて、劇場も押さえていて、全てのスタッフ、キャストとの契約は済んでいる。そんなことがあるのか？ いや、よくないだろう。できればこういうことは、今後は避けたい。そう思いながら、今日私は、戯曲を書く。

この人と...



岡田純奈バレエ団代表

おかだ すみな

岡田純奈さん

舞台を通して、人を育てる

舞台への情熱と教育への揺るぎない信念を持つ岡田純奈さん。友人について行った舞踊教室をきっかけに踊りの世界へ入り、創作活動や海外公演など数々の経験を重ねながら、長きにわたり名古屋のバレエ界を支えてこられました。「心が動かなければ、お客様には伝わらない」。その言葉どおり、技術だけでなく豊かな感性や礼儀など、人としての成長を大切にする姿勢が、多くの教え子たちへ受け継がれています。舞台にかける想いを歩みとともに伺いました。（聞き手：大寺資二）

名古屋育ちと伊勢湾台風

1945年、終戦のおよそ1か月前、疎開していた母の故郷・山梨県で生まれ、戦後は名古屋市中川区で育った。実家はお菓子やパンを製造する店で、多くの職人が働き、活気があったという。

14歳の時に伊勢湾台風を経験した。中川区は市内でも土地が低く、家は床上まで浸水した。水が完全に引くまでには、およそ2週間かかったという。「海に近い地域の人たちは、本当に怖かったと思います。私の家には、水がいくつかの川を越えて、じわじわと入ってきました」。



幼少期の岡田さん



1959年9月の伊勢湾台風で浸水した自宅前にて

水が引いた後には、流されてきたさまざまな物が残された。そうした遺品を集めて供養したものが、現在も名古屋市南区や弥富市に残るいくつかの「くつ塚」だという。写真のアルバムも水に浸かり、幼少期の写真はほとんど残っていない。職人たちが作ってくれた筏に乗っている写真がわずかに残っており、それを見ながら「やんちゃだった」と笑う。

バレエは友達について行ったことが始まり

バレエとの出会いは10歳の時だった。学校の友人が「バレエを習いに行く」と話しているのを聞き、そのまま一緒について行った。母には、「バレエに行くから月謝をちょうだい」と、すでに習うことを決めたうえで伝えたという。後年、母からその時のことを聞かされ、岡田さん自身も行動力があることに驚いたそう。ところが、その教室はクラシックバレエではなく、沖縄にルーツを持つ南條流の舞踊教室だった。琉球舞踊やさまざまな舞踊も学び、衣裳は家庭で手作りした。レオタードも現在のようなものではなく、身近な布を使い、スリッパのような衣裳を作った。タイツは綿製で、破れるたびに繕って履いた。トゥシューズも、今のように足幅や形に合わせて選べず、細く硬い靴に、足の指を押し込むしかなかった。冬にはしもやけになり、痛みをこらえて履いた。

「痛いから、レッスンが始まる随分前に履いて、どんどん立って歩くんです。そうすると、始まる頃には足が麻痺して痛みがわからなくなる。今では考えられないですね」。

それでも、バレエをやめようとは思わなかった。厳しい指導を受け、痛い思いをしても、踊ることから離れたいとは一度も考えなかったという。



バレエを習い始めた頃で
レッスン着は母の手作り

『シンデレラ』が変えたバレエ観

1972年に名古屋市民会館が開館し、翌年に特別誘致公演として実施された、チャイコフスキー記念東京バレエ団の『シンデレラ』を鑑賞したことが、岡田さんにとって大きな転機となった。それ以前にもクラシックバレエの舞台を観る機会はあった。しかし、当時の舞台には現在のようなリノリウムマットがなく、トウシューズの音が床に大きく響いた。

「ガタガタと音がして、音楽が聞こえないくらいでした。こんなにやかましいものがバレエなら、自分はやらなくてもいい、と思ったこともありました」。

ところが、『シンデレラ』の舞台を観た時、その印象は一変した。

「自分がそれまでバレエだと思ってやってきたものとは、全然違うと感じました。踊りだけではなく、物語があり、表現があり、バレエはこんなにも人の心を動かすものなのかと思ったんです」。

特定のダンサーに憧れたというよりも、作品全体に魅了された。登場人物のユーモアや豊かな表現、舞台全体から伝わる物語の力。それが岡田さんを、本格的なクラシックバレエへと向かわせた。その後、名古屋駅に大阪の西野バレエ団から講師が来ている教室があることを知り、そこで



余バレエアカデミー教師クラスの修了証書授与

も本格的なクラシックバレエの指導を受けた。さらに東京へも通い、チェケッティ・メソッドの教師講座や余バレエアカデミー教師クラスな

どで研鑽を積んだ。仲間と活動を続けながらも、自身は各地の先生を訪ね、クラシックバレエの基礎と指導法を学び続けた。

南條みのり会と創作の原点

1962年に南條流の先生が結婚を機に引退すると、残った10人ほどの仲間で「南條みのり会」を結成した。発表会を15回開催し、1976年に解散したが、この活動が、岡田さんのその後の創作の基礎となった。みのり会を支えた故・松本吉正氏からは、多彩な作品づくりを学んだ。みのり会で物語作品、民族舞踊、キャラクターダンスなど、幅広い舞踊表現に触れた経験は大きかった。



第15回南條みのり会
創作バレエ発表会にて
(1976年8月 愛知文化講堂)



右から2番目が岡田さん

「多くの発表会で、音楽や衣裳が変わっても踊りの振付は同じというのをよく見かけます。でも私は、みのり会でさまざまな作品を経験しましたので、物語を作ったり、子どもたちに表現を教えたりする時に工夫しています。当時の経験がとても役に立ちました」。

1964年、中川区に自身の教室を開いた。南條みのり会を解散後は「南條睦美創作バレエ研究所」として活動していた。その折に、父兄から「先生の名前は太凶だよ」と言われた。1980年に南條流を脱退したのを機に姓名判断を受け、「岡田純奈創作バレエ研究所」と改称。その当時バレエ界に力^{りきまるじん}丸純奈さんが活躍されていたため、自身は純^{すみ}奈と読むことにした。1983年に「岡田純奈バレエ学園」、2001年に現在の「岡田純奈バレエ団」となり、以来、岡田純奈の名で活動が続けている。

中国公演と創作作品

1983年には、日中友好祭に参加した。生徒を引率して中国に一週間滞在し、九州の団体と共に公演を行った。岡田

さん自身が創作した作品も上演し、中には子どものために作った童謡作品もあった。中国の関係者が特に関心を示したのが、歌に合わせて子どもたちが踊る作品だった。「子どもの教育に良い」と評価され、現地の人々に振付を教えたという。

「『パンツのはきかた』という童謡を使った作品でした。自分の作品を現地の皆様に伝えることができ、とても嬉しかったです」。



中国公演に参加したメンバーの集合写真（大阪国際空港にて）



中国の観光船内で現地の舞踊家に童謡作品を伝えた

岡田さんは、長年にわたり童話を題材とした作品を数多く手がけてきた。『マッチ売りの少女』『赤ずきんちゃん気をつけて』『白雪姫』など、子どもにも親しみやすい作品を舞台化した。中でも、最も思い入れが深いのが『白雪姫』である。初めて『白雪姫』を作った頃、岡田さんには一つの夢があった。それは、自分が作った童話作品で劇場を満席にすることだった。

後に、なごや子どものための巡回劇場に参加する機会を得て、その夢は実現する。当初、巡回劇場には「グランドバレエ（全幕もののクラシック作品）であること」という条件があり、創作した童話作品を上演することはできなかった。『シンデレラ』や『眠れる森の美女』などを上演してきたが、やがて条件が緩和され、念願だった『白雪姫』を上演することができた。公演は各地で好評を博し、会場に観客が入りきれず、長い列ができたこともあった。繰り返し観に来る子どもたちもいた。

「本当に嬉しかったですね。巡回劇場の機会がなければ、あの夢は叶わなかつ



なごや子どものための巡回劇場（2017年8月）で、創作バレエ『白雪姫』を上演し、満席に。

たと思います」。

舞台の数が舞台人を育てる

岡田純奈バレエ団の大きな特色は、舞台経験の多さにある。岡田さんが教室を始めた時から大切にしてきたのは、「できるだけ安い費用で、子どもたちに多くの舞台を経験させること」だった。発表会や定期公演に加え、地域の催し、屋外のイベント、巡回劇場、合同公演など、生徒が出演できる機会があれば積極的に参加してきた。多い時には年間15回ほど舞台に立つこともあったという。

「舞台の大小は関係ありません。小さな舞台でも、お祭りの舞台でも、子どもにとっては出ることと出ないことには大きな違いがあります。舞台があると、みんな集中して必死に稽古をします。実践に勝る練習はありません」。

2007年、岡田さんは日露文化交流の視察団としてロシアへ赴いた。それを機に現地の振付家を招くようになったのだが、ある時、振付家のエレナ・A・レレンコワ氏から、「このバレエ団の生徒は振付を覚えるのが非常に早い」と評価された。日頃から短い時間で振付を覚え、人前で踊るという積み重ねが、舞台人としての成長につながっている。



バレエ団公演で演出・振付を行うエレナ・A・レレンコワ氏と

自分の心が動かなければ、お客様には伝わらない

岡田さんが舞台で大切にしているのは、技術だけではない。作品の中で登場人物として生きるために心を動かし、それを観客へ伝えることが最も大切である。

「主役だけが表現すればいいのではありません。周りに立っている人も、その場で何が起きているのかを感じ、役として立たなければいけません」。

童話作品を上演する時には、群舞や脇役の生徒にも、細かく演技を指導した。舞台上でただ立つのではなく、相手の言葉を受け止め、心を動かし、反応することを求めた。

ある合同公演のオーディションでは、岡田純奈バレエ団の生徒数人がすぐに選ばれ、振付家から「この子たちは持っているものが違う」と言われた。岡田さんは、それが日頃から教えてきた「周囲にいる時の立ち方」の違いだったのではないかと考えている。

「あなたたちの心が動いていなければ、お客様には何も伝わりません。声を出さないバレエでも、心から発したものは必ず伝わります」。文化小劇場のような客席との距離が近

い会場では、観客の反応が直接伝わる。「お客様を自分たちの方へ向かせたら、あなたたちの勝ち。眠らせたら負け。舞台はお客様との勝負だと、いつも言っています」。

岡田さんにとって、発表会と一般公演は明確に異なる。観客が入場料を支払って観に来られる一般公演では、出演者はその期待に応える責任を負う。「身内だけが喜ばばいい舞台ではありません。お客様に何を届けるのかを一番に考えなければいけません」。

バレエを通して、社会で生きる力を

岡田さんが子どもたちにバレエを通して教えたのは、挨拶をする、時間を守る、話を聞く、努力を続ける、注意された時に自分を振り返ること。そうした社会生活の基本を、稽古場で身につけてほしいと考えている。

「バレエのレッスンをきちんと受けることは当たり前です。でもそれ以前に、挨拶することや遅刻をしないこと、帰る時にきちんと声をかけることが大事です」。遅刻する生徒には、与えられた時間と月謝の意味を話す。「お父さんやお母さんが一生懸命働いて、あなたたちにバレエを習わせてくれている。その時間を無駄にすることは、お金を捨てることと同じです。与えられた時間を一生懸命に使うことが、あなたたちの役目でしょう、と話します」。

時代とともに、教育のあり方や家庭の考え方は変わった。厳しく注意することが難しい時代になり、岡田さん自身も戸惑うことがあるという。それでも、子どもは家庭だけで育つものではないという信念は変わらない。「子どもは親だけで育つものではありません。外へ出て、いろいろな大人に見てもらい、注意され、アドバイスを受け、みんなに守られて育っていくものだと思います」。過去には、注意を受けても謝ることのできない子どもを、自宅まで連れて帰ったこともあった。食事をさせ、自分の言葉で謝れるようになるまで向き合った。保護者も、「そこまでしてくださるならお願いします」と受け止めたという。厳しさは、突き放すことではない。その子どもの将来を考え、責任を持って関わることだと岡田さんは考えている。

次の世代へつなぐ

岡田純奈バレエ団からは多くのダンサーや指導者が生まれた。海外で活動する人、医師や建築家など別の道へ進んだ人、家庭を持ち、自分の子どもを再びバレエ団へ通わせる人もいる。岡田さんは、バレエを学ぶ子どもたちには集中力があり、勉強にも熱心な人が多かったと振り返る。試験期間中でもレッスンを休まず、「バレエをしないと勉強に集中できない」と話した生徒もいた。「バレエは、先生の動きを見て、音楽を聞いて、順番を覚え、体の隅々まで動か

さなければいけません。集中していなければできない。脳も体もたくさん使うから、それが勉強にもつながるのかもしれない」。

海外で踊る生徒には、日本へ戻ることを勧めるのではなく、現地で給料を得て踊り続ける道も大切にしたいと考えている。日本では、男性ダンサーは若いうちから出演料を得られる一方、女性ダンサーは高い技術を持っていても、舞台に立つために費用を負担することが少なくない。そうした厳しい現実も見つめながら、一人ひとりにとって最も良い道を考えている。

「若い時にお金をもらえるからといって、それが10年後も続くとは限りません。今、商品として舞台に立つのなら、きちんとレッスンをし、自分を磨き続けなければいけない。経験は増えても、肉体は少しずつ変化します。その中でどう自分を保つかを考えなければなりません」。

お客様をこちらに向かせる舞台を

岡田さんは、自分を「ぼんやりした人間」と笑う。しかし、その歩みをたどると、好奇心と行動力にあふれていることが分かる。近年は再びピアノを始めた。いつか自身初となるピアノの発表会にも出たいと話す。80歳を迎えても、新しいことへの興味は尽きない。これからの目標を尋ねると、まず「次のプリマ(※)を育てたい」と答えた。その言葉には、舞台を続け、未来へつなぎたいという強い思いが込められている。岡田さんが長年伝え続けてきたのは、踊りの形だけではない。

「お客様をこちらに向かせたら勝ち。眠らせたら負け」。その言葉は、舞台人としての覚悟であると同時に、人を育てる教育者としての信念でもある。岡田純奈さんは今日も、舞台を通して人を育て、次の世代へバレエの心をつなぎ続けている。

※バレエ団の顔となる主役級ダンサー。



岡田純奈バレエ団創立60周年記念公演『白鳥の湖〈全幕〉』
(2024年11月24日 愛知県芸術劇場大ホール)

まちなかを文化芸術の入口に ～伝統芸能への市民参加と地域のお祭り～

“公募で集まった市民が、プロの演出家や俳優とともに一つの舞台をつくる”
私自身はその経験がきっかけで、歌舞伎、そして常磐津節の世界を志した。
「きっかけ」は「まちなか」。誰もが文化芸術と出会える入口を、地域のお祭りに焦点をあてて紹介したい。
(まとめ：常磐津綱鵬)

市民参加が人生を変えた

1996年、当時中学生だった私は、毎年開催される「名古屋まつり」でオーディションによる市民ミュージカルに参加した。ミュージカルが大好きだった私のために、母が募集のチラシを見つけて応募してくれたのだ。ごく普通の中学生だったが、名古屋の演劇界で活躍する演出家の故・齋藤敏明さんや、衣裳の木場絵理香さんらスタッフ陣をはじめ、多くの大人たちと同じ舞台上に立てたことが嬉しかった。栄の真ん中で多くの観客に囲まれながら舞台をつくる経験は、中学生の少女の中に、また舞台に立ちたいという熱い思いを灯した。

翌年の名古屋まつりの「市民KABUKI」には自分で応募し、参加。指導・監修をしてくださった名古屋むすめ歌舞伎の皆さんによる「Si Si Si Kabuki」は、歌舞伎の名場面を織り交ぜながら複数の花道を使った斬新な演出で、多くの観客を魅了することができた。高校1年生だった私は、祖父が見せてくれた歌舞伎のビデオを見たことがあるという程度。伝統芸能にはほとんど縁がなかったが、この舞台をきっかけに、私は歌舞伎を学びたいという夢を持つようになった。今では歌舞伎の一環として学んでいた常磐津の道歩んでいる。もしあの時、市民参加の舞台がなかったら、今の私は全く違う人生を送っていたかもしれない。



1997年 名古屋まつり 市民KABUKI「Si Si Si Kabuki」

お祭りは文化芸術の入口になる

名古屋の歴史や文化の魅力を発信するイベント『やっとかめ文化祭 DOORS』（2026年10月17日～11月15日）が今年14年目を迎える。市内まちなかに特設ステージを設け、狂言やストリート歌舞伎、箏曲や尺八の演奏など、誰もが気軽に伝統芸能に触れられるイベントである。老舗料亭で名古屋の芸妓の舞を鑑賞する「お座敷ライブ」や、文化祭

を楽しみながら運営のサポートや情報発信を担う「やっとかめ大使」を市民から募集するなど、多彩な取り組みを続けている。

2022年のやっとかめ文化祭で香川絢子さんが監修された企画「はじまりの音」では、障がいがある、なしに関わらず書道家、太鼓奏者、ハープ奏者、ダンサーに道化師、学生など、国籍や年齢も様々に多様な表現者たちがフラッシュモブ(*)を披露。さまざまな楽器の音色や歌声に合わせて、新聞紙や生花を使用したパフォーマンスなどで観客を沸かせた。文化芸術のプロも市民も垣根を越えて、その場を盛り上げ、楽しむことに夢中になっている、そんな光景が印象的だった。ただただ、楽しく人と人がかかわれるというのがお祭りの良さなのだろう。そんなお祭りという親しみのある文化に、伝統芸能の要素を取り入れることで、一層、身近に感じてもらえたら良いと思う。



2022年 やっとかめ文化祭「はじまりの音」
(アスナル金山)

子どもたちと伝統芸能のかかわり

近年続く名古屋市の劇場の閉館で、文化芸術の後退を危惧している。また物価上昇の影響で文化施設の使用料も値上げを余儀なくされ、利用者にとって厳しい状況となっている。市民が文化芸術に触れる機会がまた一つ遠くなってしまうのではないかと心配している。

2014年頃まで市内のとある中学校で三味線の非常勤講師を務めていた。そこではピアノには触れたことがあっても、三味線は見るのも触るのも聞くのも初めてという生徒ばかり。初めて自分で弾く三味線の音、糸をおさえる指の感覚。初めは緊張した面持ちだったが、触れていくうちに自分で奏でる音を楽しむ姿が見られた。子どもたちにとって貴重な経験であるし、授業がきっかけで、もっと学びたいという子も出てくるかもしれない。今後もずっと続けていきたい

と思っていたが、時代とともに三味線の授業はなくなってしまった。あれから12年。あの時の三味線18挺は今も中学校にそのまま眠っているのだろうか。



中学校での三味線授業

地域とお祭り

私の住んでいる名古屋市中村区では夏になると盆踊り、秋になると子ども太鼓や子ども神輿が行われる。太鼓が鳴り、音楽にあわせて踊ったり声を出したり、人と人の触れ合いが間違いなく存在している。また、上手い、下手は関係なく、大人も子どもも「楽しむ」ということが最も重要だ。そこには芸術、芸能、文化がうまい具合に混ざり合っているように思う。



今も続く町内の子ども会の「子ども神輿」

祭りや神輿、盆踊りは運営が大変だからとやめてしまう地域も多いと聞かすが、この辺りの地域にはまだ残っていて、それは本当に有難い。続けてくれている人たちがいるということであり、実は支えているのは定年退職後の60代、70代の地域の方がほとんど。「若い人は？」と聞くと「今の若い人は忙しいからねえ」という。地域に今も残る文化を無くさないためにも、次の世代へバトンを繋いでいかなければならない。その忙しい若者たちをどのように巻き込んでいくかが課題ではあるが…。

世代を超えるコミュニケーションの場として、地域で活動する人たちが互いに励まし合い、お祭りを「子どもたちのために続けよう」と支え合うことができれば、その活動は1年、2年と続き未来へつながっていくのだと思う。もし運営に参加するのが難しければ、お祭りに参加することから始めてほしい。

2025年、清須市の美濃路沿いの町内会では、子ども会がなくなってしまった町内に、新たに盆踊りや子どもが楽しめるキッズ祭りを企画した。はじめは難しいと懸念されな

がらも、いざ動き出したら、町の人たちが協力してくれた。神社会の許可を得て、神社とその横の草がぼうぼうに生えた公園を会場とした。子どもが来ても危なくないよう草刈りや木の枝の回収を、大人たちが汗だくになりながら取りかかった。近所の家々にもチラシを持って挨拶して回ると、「応援しているよ！」と励みの声をかけてくれた。どれだけの子どもや町の人が来るか未知なる祭りに向けて。

お祭り当日。子どもが楽しめる紙芝居や手持ち花火、櫓もない盆踊りにキッチンカーと町のお店。公園は見違えるほどの人とお店でいっぱいになった。たくさんの人たちが、浴衣を着て家族や友達同士で集まってきてくれた。実行委員会の皆でその光景を見た時、嬉し涙が出た。自分が子どもだった頃は近所のあちらこちらで、盆踊りが開催されていた。あの時の楽しかった思い出が蘇った。今年も開催を熱望されている。



2025年に開催した第1回美濃路キッズ祭り（清須市）

次の世代へ灯をつなぐには

最近は学校の授業でもタブレットを使用している。赤ちゃんですら、お母さんやお父さんではなく、スマホとコミュニケーションをとっている。そんな親も赤ちゃんではなく、スマホを見ている、なんて姿を見かけることがある。学校でも家でも外でも、画面越しに人とのコミュニケーションをとることが主流になってきている。果たして本当にそれで良いのだろうかと常々思う。人と人がかかわって、その場を楽しむこと。それがいつも身近にあれば…。30年前、市民参加の舞台が私の人生を変えたように。架空ではない実体験の機会がまちにあふれ、人と人との出会いが誰かの未来を変えるかもしれない。

忙しい若者を巻き込むお祭りが無理なく続き、子どもたちが集う。そんな風に地域やまちなかが文化芸術の入口となり、プロと市民をつなぎ、未来の担い手を育てる場所であってほしい。名古屋が、そんな可能性あふれるまちでありますように。スマホに目を落とさず、地域に目を向けるため、みんな顔を上げていこう。

※事前に打ち合わせた参加者たちが、公共の場で突然行うパフォーマンスのこと。

#zoom up

ズーム・アップ

現代美術家

う え ま つ

植松ゆりかさん

物語を紡ぐ

瀬戸市を拠点に活動している現代美術家の植松ゆりかさん。

2026年7月18日～8月30日に現代美術レジデンスプログラム『お盆の針仕事―蚕の里帰リー』が開催された。その展覧会に伺い、解説いただきながら幼少期の体験などをお聞きした。

(聞き手：設楽 陸)



—どんな家庭環境でしたか？（お話しできる範囲で）

私は信仰深い両親のもとで大切に育てられました。小学校にあがるまでは自宅保育でしたので、家の中で見聞きしたものが全てでした。唯一、隣家の幼馴染とは遊ぶことができたので、その子の家とは少し違うなとは感じていましたね。小学生になるといろいろな情報が勝手に入ってくるので、感じていた疑問がだんだんと膨れていく感覚がありました。



1歳頃の植松さん

家には普通の絵本2冊ほどと「聖書絵本」しかありませんでした。「聖書絵本」はノアの方舟の話で、そこに出てくる鳩が平和の象徴とされていて、それが当時あまり納得がいかなかった記憶があります。大人になり、国旗を翻した革命の証としての作品を作ろうと「虹色の鳩」を作り、それからモチーフにしています。

祖母だけは信者ではなく、よく一緒に過ごしました。

とてもクリエイティブな人で、手先が器用で縫い物をよくしていて、その様子を見るのが楽しかった。今の私があるのは、祖母の影響が大きいと思います。私の「めをあけてね」という作品は、昔、祖母と一緒に寝る時に、私が祖母に「私より先に寝ちゃうとつまらないから、目を開けて寝てね」って言った言葉なんです。祖母は私にとっての救いでもありましたね。

小学4年生の時に祖母が亡くなった後は、ずっと葛藤していました。悩み抜いた末に中学生の頃、1年間ほど両親と話し合いを続けて、私は宗教を脱退しました。こうした経験は作品を制作する上での土台になっていると思います。ただ、両親は私のことを大切にしてくれていましたし、否定したいわけではありません。作品にすることで自分自身の葛藤を整理しているんだと思います。



「ほふられたもの - ハト -」
(2024年)

—美術大学（美大）へ進んだきっかけは？

美大へ行きたい気持ちはあったけど、あまり賛成されなかった。「高校卒業後は椅子職人に弟子入りしよう」と全国の椅子のリペア職人さんへ片っ端から電話しました。根拠もなく、「椅子を作る人なら何でも作れる」と思い込んでいたからです。高校3年生の夏休みに試しに1週間受け入れてくれる工房へ行ったものの、聞いていた話と違い、「弟子を雇う気はない」と帰されて。挫折してボロボロになって帰宅しました。その姿を見た両親が不憫に思ったのか、美大進学を認めてくれたんです。実家が静岡なので両親が安心する、と考えて名古屋造形芸術大学（現：名古屋造形大学）の総合造形コースに進学しました。

大学では先生に評判が良いわけでもなく、課題制作をひたすらこなしていた感じです。辛かったのは、1人暮らししていたアパートで覗き被害にあって。半年間ずっと壁や窓に新聞紙を貼るくらい怖かった。だんだん腹が立ってきた反面、私が悪かったんじゃないか、隙があるからじゃないか、みたいな変な感覚になってしまったんです。卒業制作の「リカちゃんハウス」はその時の経験をもとに作りました。簡単にいうと大きなハンドバッグを開けると寝室と階段があって、階段側の覗き穴から見ると寝室の中で半裸の女性がのたうち回っている作品。覗かれている側は被害者だけど、見せていると考えたら加害者でもある。覗いている側（観客）は加害者だけど、見たく

もない様子を見せられていると考えれば被害者でもある。加害者と被害者が同列になる作品を作ってみたかったです。怖かった経験を作品にしたことで、不思議なくらいすっきりしました。作品を褒めてくれる人もいれば、辛辣なことも言われました（笑）。



卒業制作の記録（2011年）

大学卒業後は「お金をしっかり貯めてレジデンス（※）に行くぞ」と思って映像関係の会社に就職したのですが、とてもハードワークで。作品を制作する時間がとれず心を病んでしまい辛かったです。結局、3年程で退職しました。

一個展を開催した経緯などを教えてください。

2023年に、長野県岡谷市でシルクの歴史や産業などの地域資源に触れ、シルク関連の作品を制作するプロジェクト「岡谷シルクアーティスト・イン・レジデンス」に参加しました。そこで初めて蚕を使用したぬいぐるみを制作し、その後も絵本や立体作品など蚕をモチーフにした作品を発表してきました。

美濃加茂市は養蚕が盛んだったため、今回の個展会場である、みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアムでは、養蚕をテーマにした民具の収蔵品展を毎年開催しています。また、2009年から継続して参加している、森で実験的な表現を試みる「野外研究」（現：みのかもannual）では、毎年作品展示を続けてきました。そのご縁があり、今回の個展「お盆の針仕事—蚕の里帰り—」に繋がったんだと思います。



「内側の桃源郷」（2023年）／
撮影：城戸 保



みのかも annual 2023展示「カニサイ」

—蚕という存在に惹かれた理由は何ですか？

蚕は人間に美しい糸を供給し続けるために品種改良されて生涯を家畜として飼育され、その代償として命や飛ぶことを失う存在であることに自分自身を重ねました。あと、繭は中に乾燥されて死んだサナギがいる状態で茹でられます。出来たてのまだ生きている繭はずっしりと重く、表面からその温もりを感じる。でも乾燥したらカラカラで軽くてあんまり生き物感がしない。その閉じられた繭の中で生と死の両方が存在してるんだと思うと、自分の作品と繋がっている気がします。

私の作品はよくカラフルでカワイイと言われますが、テーマが重いので、暗くなりすぎないようにあえてやっているとあります。そのまま出しちゃうと、見る側もきついと思うので。また、制作では、「両極にあるものを一つにしてフラットにする」ことを意識しています。テーマが暗ければ暗いほど、より可愛らしくしがちかもしれないです。

—今後の展望はありますか？

今回の展示がこれまでの蚕作品の一つの総括になりました。同時に「まだ作りたいもの」がたくさん見えてきました。今後は各地の養蚕文化などを調べながら、その土地ならではの物語をリサーチしてみたいです。例えば、同じ蚕でも地域によって歴史や信仰がまったく違うので、その違いを巡る「蚕アートキャラバン」のような形でこのプロジェクトを発展させられたら面白いなと考えています。

—最後に、なぜ作品を作り続けるのでしょうか？

正直、自分でもはっきり説明できません。でも、お金が本当に少ない時にも、作品を作れているって思うと幸せでした。作品を作ることによって過去を受け入れられたり、人に歩み寄れたり、自分が少し前へ進めたりする。だから、きっと私はこれからも作り続けるんだと思います。好きになってしまったから、もう仕方がないんです。そう、もうしょうがないんです（笑）。

※アーティストが一定期間特定の場所に滞在し、その土地の文化や環境を活かして作品制作を行うこと。



「なごや文化情報デジタルブック」スタートしました!

名古屋の文化芸術を定期的に紹介する専門誌「なごや文化情報」が、紙の冊子に加えてデジタル版でもご覧いただけるようになりました。気になる記事を検索したり、近年のバックナンバーを読み返したりと、スマートフォンで便利にお楽しみいただけます。もちろん無料ですので、ぜひ一度チェックしてみてください!

なごやの文化

ひと・こと・いまを届ける



「なごや文化情報デジタルブック」はこちら



なごや文化は寄附でもつ



名古屋市文化基金

支援・育成事業

市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成

参加・体験事業

市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施

鑑賞事業

優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供

市民文化の情報発信

情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信

皆さまからいただいた寄附金を活用し、
なごや文化創造のための様々な事業を展開しています!

名古屋市文化基金の
詳細および
寄附のお申込みは
こちら



ご寄附に関する
お問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

デザインを通して、
企業様とお客様を結ぶ

EIGHT DIGITAL WORKS

- グラフィックデザイン
パンフレット・カタログ・
チラシ・POP 他
- WEB デザイン
WordPress や Wix 等での
制作に対応
- 一般印刷・オンデマンド印刷
DTP データ・Office データの印刷等
- 言語翻訳 (特殊言語対応)
WEB や POP、
海外向けマニュアルの翻訳等

有限会社 エイトデジタルワークス

〒453-0014 愛知県名古屋市中村区則武1-9-9
側島第2ノリタケビル4F
Tel. 052-452-5258(代) Fax. 052-452-5267

<https://www.eight-dw.com/>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

20Hz ← → 20kHz

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エアアンドブイ

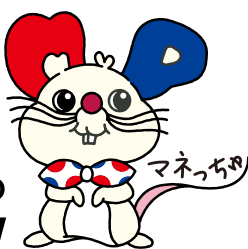
〒464-0846 愛知県名古屋市中村区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテッジ葵ビル301

TEL: (052) 508-5095

FAX: (052) 508-5097

Web: www.mane-pro.com

E-mail: mane-pro@mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。

◎毎月24,000部発行

※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布